
雪道十歩

鈴架ゆづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪道十歩

【Zコード】

Z0193P

【作者名】

鈴架ゆずる

【あらすじ】

俺は人生で一番楽しく、悲しかったあの夏の日を忘れる事はないだろう。何年も経つた今、俺はあの村で昔のことを鮮明に思い出していく。親友の最初で最後の悲しく、大きな裏切りが今の俺を生かしている。この物語は俺、神崎之道があの夏、村で出会った暖かな人々や優しい日々、そして、一生忘れないことのない悲しい出来事を綴る物語である。

プロローグ ～雪の中へ～

晴れやかな空だった。

直視するにはあまりにも眩しすぎる十一月半ばの冬空を見上げる。雪が道の表面をすべて覆い、周りは辺り一面見事な雪景色。車を村の入口看板があつた場所に止めて、一步一歩村の中へと進んでいく。

舗装されているこの一本の道だけ、村から分離されたように感じるのは今でも同じだ。

不意に庭らしき場所を覗けば、季節を間違えてしまった綺麗で哀れな夏の花が一輪、雪の表面から顔を出している。まるでその花だけ、あの夏の日から時間が止まっているような気にもなつた。

ただただ何もない雪道を、自分の足音だけが聞こえるままにまた歩き続ける。

無音の白い世界を歩いていると自分だけ、どこか違う世界に取り残されたよつた気分にもなつてくる。

この村に俺が居たのは、蟬がせわしなく鳴っていた夏。

あの夏とは天地がひっくり返ったと言つてもいいほど、この村は変

わってしまった。

いや、この場所を村と呼んでいいのかそれすらも疑問に思つ。人の気配すら感じさせないほど閑静で、どこか不気味とさえ思つてしまつ。

目を閉じれば、この村で出会つた何十人もの優しかった人々の顔が今でも鮮明に思い出すことができる。
それほど、俺にとってこの村の人の存在といつのはとても大切だつた。

一つ一つを順番に思い出していく内にいつも最後にいきつくのは、俺に最高の思い出をくれた親友の顔だ。
でも、彼がした最後の裏切りを俺は何度も憎み、何年もの月日を経た今でさえ、俺に大きな傷跡を残している。

あの裏切りから数ヶ月は、夜がくるたびに何度も泣いて、何度も自分を追い詰めたくらいだ。

けれどそれと同時に、彼の最後に見た笑顔を忘れる事は一度もなかつた。
彼がいなれば、俺は今頃この晴れやかな空を見ることはなかつただろう。

けれど決して、俺はあいつに礼なんか言わない。

裏切られて、俺はこんなにも長く間苦しめられているのだから謝りにこい。

いつもよりじどりからともなく現れて、笑つて俺の前に出てくればいい。

そうしたら俺は、笑つてお前を許してやることができる。

その願いが叶うのなら、自分を殺してやってもいい。

けれど、どんなことをしても俺の願いが叶うことはない。

それに、お前はそんなこと願わないこともわかってる。

そんな馬鹿なことをする余裕があるのなら、自分が出世する努力でもするんだな、と

皮肉っぽく、けれど俺のためを思つてお前なら笑つてそういう言つのだ

る。足しげく通つたお前の家を見上げながら、俺は今お前を思い出してい

た。
俺がこの村で過ごした日々はとても暖かくて、優しくて、切なかつ

た。
人生で一番楽しく、人生で一番辛い思いをしたあの夏の日を一生忘
れない。

第一章 山奥の村（1）

その日はいつにもなく晴れ晴れとした大空が広がっていた。

まるでこの地に立ち入ることを（俺は決して嬉しくはないが）歓迎されてくるようだ

移り変わる景色をただ何も考えずに眺めながら、今日は実に暑そうだ、どうしたらこの暑さから気を紛らわせることができるかとそんなこともいことばかり、ぼんやりと考えていた

助手席ではラジオから流れる今時の流行の音楽を揚々と歌い上げる父と、そんな父にガムを渡す母の光景が目に入る。

時間が経つにつれて、高層ビルやマンション、ファストフード店などいつも見慣れていた建物なんかは完全に流れる景色からは消えていた

あるいは緑、緑、緑

地元の人たちしか利用しないであろうスーパー

また緑、緑、緑

けれど、いつまでも似たような景色を眺めているのも嫌いではなかつた

広大の縁の土地は山に向ひ今まで広がつてゐるようだ

その景色を見て感動なんてものはなかつた

ただこの土地で一生暮らすなんて真似俺には出来ないな、と思つ

一息つも、視線を遠くの山から近くの脇道に逸りす

「（あ、こまえこの脇にいたのは狐だらうか）

今し方通り過ぎた何かがいた場所を覗きこもつとしたが、父の「え
道」という呼びかけにそれは叶わなかつた

「あと1時間くらいたつたら婆ちゃん家に着くぞ」

斜め後ろの体制で振り返る父と一時田が合図がすぐ隣れる。

「でも之道を1ヶ月もお義母さんのところに預けるなんて大丈夫か
しり」

母も斜め後ろの体制で俺をちらりと見やる。俺は窓の外の景色に田
線を合わせたまま。

「なに田舎で不便な点は多いが、自然はたくさんあるんだ。之道くら
いの年齢ならそういう自然にたくさん触れておくべきなんだ」

長旅だったと言しながら嬉しそうな父。やはり自分の故郷だからだ
らつか

今、俺たちが向かっているのは父方の祖母の家だ。

母方の祖父母は俺が生まれると同時に二人とも亡くなっている。

「之道もおばあちゃんの家に1ヶ月も滞在するなんて不安じゃない？」

「別に……」

「本当にいつからこんなに無口になっちゃったのかしら……」

「まあまあ。男の子なんだし、そんな時期もあるわ」

父と母が何かを笑つて話しているのは微かに聞こえたが、急激に意識は奥深く吸い込まれていき、俺の肩をゆさぶる母の声で目を覚ましたのは、それから約1時間後のことだった。

主に着替えしか入っていないスポーツバッグを肩にぶら下げて、停

車した車
のドアを左手で開ける

その瞬間に、ぶあっと熱気が押し寄せ、へりへりと田畠のような感覚
が押し寄せる

それまで快適空間の中で悠揚と数時間過ごしていた俺のこの気温差
はこわやか辛
い

「暑いわねえ……」

「さすがといひべきか……懐かしいよ。よく爺さん婆さん連中が田射
病にかかるたつけな」

「笑い事じやないわよ馬鹿」

暑い暑いこと言いながらも楽しげに話して歩く父と母の後ろから数歩
下がつてついて行く

車を停めたすぐ脇には、古ぼけた看板が立つており読みなれりで
読める字で『古森村』と書かれていた。

周りを見渡しても知らない景色、土地、馬や牛などの家畜

「やつらの話じやないが…急に大道を一ヶ月も預けてほしけんて
母さんも何都えてんだか」

「やつぱり不思議よね。でもまあ、たまには滅多に会えない可憐い
孫と一緒に過ぐしたいんでしょ」

「やつこえざ、之道と遡りやんまだ2回しか会つたことなごか」

そう、俺は自分の祖母にあたる人と一回しか会ったことがない

一度目は俺が小学校に入学する前。けれどその時の記憶はほとんどない。

一度目は四年前だが、祖父の葬式の会場だったから話すとかそういう状況ではなかつた。

けれどその中でも鮮明に覚えていることは、自分の夫の死を目の前にして最後の最後まで涙を見せない祖母の姿だつた。

「ほら、ついたぞ」

「本当に何も変わってないわね」

そう言いながら慣れた手つきで玄関の鍵を開けて入つていく父と母

「ほり、之道も早く来い」

「ああ……」

俺もそれに続二つとしたが、

「…？」

何かが、誰かがいる気配がする。

誰だろう、村の人かな。

まさかこんな時代に、真昼間から、旅人の金目を盗もうとかそういう思考回路の奴がいるわけじゃあるまいし

嫌な予感がする方向を俺はゆっくりと振り返る。振り返る

「あ……」

そこには軽く息切れを起こしている俺と同い年くらいの、男が立っていた

その田舎じつかりと俺を見ており、まるで追いかけて走ってきたかのようだ

なんだこいつ……気味悪い

よそ者は歓迎しないとか、今時そういうのなのかな？

そういうのはかかわらないのが一番だ。

俺は無視を決め込もうとしたときだった

「え…道…つ?」

「え…」

その男の口から出てきた名前はあれこゝ俺の名前で、一瞬背中が凍りつく

「(なんだ…)」

何故俺の名前を知っている、と田線で訴えていくと男は次第に俺の
ほづへ駆け足
で寄つてくる

そして男はかなり怖い顔、といつも絶望に満ちたような顔をしながら俺より視線が高い位置から見下してくれる

「…本人か？」

「そうだと…たら…ひつ… つ…？」

不意に手首を強引に掴まれたことに動搖し、どうするんだと言いかけた口は止まつた

「之道来いーー！」

「は…つ？」

「いいからー見つかる前にーー。」

俺は祖母の家に入ることなく、なぜか俺の名前を知るこの知らない男に腕を引っ張られたまま…林の中へ走ることになってしまった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0193p/>

雪道十歩

2010年12月29日20時52分発行